



紅梅のことを知ったのは1997年の正月のことでした。安塞県文化館の知り合いに案内されて、安塞の町に近い馬家溝の陳という家庭を訪問しました。戸主の陳丕亮さんはこの地方の人なら誰でも知っている有名な腰鼓の名手であり、夫人の候雪招さんも又、剪紙が得意で、招かれてヨーロッパへも行ったこともあるほどです。二人には年が近い5人の子どもがあり、紅梅はその四人目で、当時、小学校三年生でした。紅梅は腰に腰鼓を結んでましたが、大人たちが感情漲らせて力強く腰鼓を演じている際も、遠く離れたところで決まり悪そうにこちらのほうを見ていましたので私の注意をひきました。

このおとなしく可愛らしい女の子は、しかし、カメラのレンズを恐れず、出来上がった写真には天真爛漫な無邪気さが溢れていました。この後、私は毎年正月には、まるで親戚を訪ねるように、ここで何日かを過ごすようになりました。来る度に、紅梅は少しずつ変わってきました。翌年の正月には、既に父親と一緒に、すっかり自分のものにした、楽しさいっぱい「歓迎の腰鼓」を踊ってくれ、居合わせていた中央テレビ局の記者は、これ幸いとばかりにビデオを紅梅に焦点を合わせ続けました。

三年目の正月、私は前もって電話でスケジュールを伝えておきましたので、家族は皆、早々と家で待っていてくれましたが、紅梅は待ちかねていたように、習ったばかりの新しい腰鼓シリーズを私と友人に披露してくれました。紅梅の背丈も伸び、おしゃべりも上手になり、顔立ちは以前にも増して可愛らしくなっていました。腰鼓は完全にマスターして、学校の腰鼓団のメンバーに加わっているとのことでした。加えて剪紙の練習も始めたとのことで、紅梅は自分の後ろの窓格子に貼られた剪紙を指差し、ひとつひとつ丁寧にあれは自分が剪ったもの、あれはお母さんが剪ったものと教えてくれました。

段々に紅梅の剪紙も素晴らしいものになってきて、紅梅は父親の腰鼓の芸能と母親の剪紙芸術を受け継



陕北女娃を見る紅梅 2004年夏



お母さん(左)の制作の様子を見る紅梅(中) 2006年2月

いだ、何でも出来る小芸術家だと皆が誉めそやしています。彼らの家は腰鼓と剪紙を生業として生活しており、それで、毎年正月ともなると、遠方からの客で溢れ、時には紅毛碧眼の海外からの客が噂を聞いて教えを求めてやってくることもしばしばです。陳氏は、疲れは縁がないとばかりにいつでも客人のために一連の歓迎腰鼓を踊り、候夫人は皆の見る前で剪紙を剪って見せ、紅梅も傍らで腰鼓を踊ったり、剪紙を剪ったりで、忙しいのも又楽しからずやといった風です。

小さい紅梅は既に有名人です。というのは、中央テレビ局のシリーズ番組《同在藍天下》(青い空の下の仲間たち)、陝西テレビ局のシリーズ番組《西部娃娃》(中国西部地方の子供たち)は専ら紅梅を主に撮影し放映しており、他にもドキュメンタリーニュースの報道では10回以上も取り上げられているのです。今年の正月、春節を楽しく過ごす‘西部娃娃’たちのニュースを中央テレビ局が報映するなら、その中にきっと紅梅の姿があるでしょう。

